The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スウィフトのプライド観(Ⅰ)
Author(s)	渡辺, 孔二
Citation	Osaka Literary Review. 1962, 1, p. 33-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25786
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スウィフトのプライド観（I）

渡　辺　孔　二

「Pride」という語は「Nature」という語と同じように意味の把握し難い語であると共に，又，それだけ重要な意味を有している．ここではスウィフトの詩にあらわれる Pride (Proud, Proudly) という語を中心に，彼の詩における彼の「プライド観」の特徴を調べてみる．

I. 対称としたスウィフトの詩篇総数： 253. このうち，pride (proud, proudly) という語の出てくる詩篇数：64. 64篇のうち，pride (proud, proudly) の頻度回数の内訳：6回——3篇，4回——5篇，3回——6篇，2回——11篇，1回——39篇．pride (proud, proudly) の頻度数 Total：117. 内訳 (pride：76, proud：37, proudly：4)

II.「Pride」を「攻撃」しているもの． A)「Pride」が他語と並列的に用いられているもの．

a. 二語並列．Pride,〔cruelty (2), gross philosophy (1), ignorance (1), avarice (1), vanity (1), insolence (2), passion (1), profit (1), wealth (1), false patience (1), luxury (2),〕((　) 内は回数を示す．以下同様)

b. 三語並列．Pride,〔censure, pedantry：envy, cruelty：dullness, conceit：falshood, spleen：envy, avarice：folly, faction：expence, vain magnificence〕(各1)

c. 四語並列．Pride,〔self-love, ambition, envy〕のみ．

d. 五語並列．Pride,〔tobacco, censure, coffee, port〕のみ．

e. Pride：と共に用いられている語の頻度数：pride (24) に対し，envy,

cruelty（各3）avarice, ignorance, insolence, censure, luxury（各2）, gross philosophy, vanity, passion, profit,wealth, false patience, pedantry, dullness, conceit, falshood, spleen, folly, faction, expence, vain magnificence, self-love, ambition, tobacco, coffee, port（各1）.〔整理の都合上，原文の形を変えている．e. g. Pride and Cruelty→pride, cruelty としている.*〕

B） pride を目的語（my, your, his, their etc＋pride の形）とする動詞としては，(11) feed (1), mortify (5), humble (2), enflame (1), forget (1), gratify (1), である．

C） pride を限定づけている形容詞としては， empty, stubborn, lazy, over-weening, highest, fond paternal, summer's, (7)

D） pride of＋名詞の形．（4）pride of〔France, her sex, brutes, man〕（最後の man のみ詩の前書き中にあるもの．）

E） 他語と同格（的）に用いられている形．

Young's Universal Passion, Pride.

Lust of Pride.

F） pride のみの形．

desire as well as pride.

Let pride be taught.

G） A pride という形．

A pride that well suspends poor mortals fate.

H） その他の形．

Their only pride is to refuse.

Whene'er your Pride recals your Grief.

I） proud と共に並列的に用いられている形容詞．（9）

weak, ignorant, wond'rous, turbulent, loud, poor, spightful, unjust, great.

J) proud＋名詞の形（名詞＋proud）

proud tyrant sex of hers, proud doctors, proud ign'rance, proud usurpers, proud triumphal car, proud baronet of Nova Scotia, proud boaster, proud Kettle, proud Iberia, fortune proud, proud Roxana, proud ambition, Edgar proud〕（各１）

K) the proud の形.

th' ungrateful or the proud,

Parthenope the Proud, the Poor, and ... the Proud.

L) その他の形.

prouder than the D—l.

III.「Pride」を「是認」しているもの.

A)

a. pride and happiness (1)

b. manners, decency, and pride (1)

c. breeding, and wit, and air, and decent pride (1)

e. pride (3) に対し, happiness, manners, decency, breeding, wit, air (各１).

B)

justify (1)

C) (6)

an old unvanquish'd, conscious, a gen'rous, magisterial, modest, decent, (各１)

D) (2)

pride of 〔her wit, Drury-Lane〕

I) (1)

pleas'd.

IV.

○前置詞＋pride の形. (11)

〔with (6), in (1), on (1), thro' (1), for (1), to (1)〕＋pride.

○ (be, make, too)＋proud＋(to, of) の形. (15)

○副詞＋proud の形.

〔exceeding, very, extreamly〕＋proud.

○ proudly の形. (4)

〔題名中に用いられている pride (一篇の題名中のみ: *On reading, Dr. Young's Satyrs, called the 'Universal Passion', by which he means Pride* 1726/1734) はこの統計中から除外されている.〕

I. への「注」

スウィフトの詩篇総数: 253というのは Joseph Horrell の edition による *Collected Poems of Jonathan Swift* (London, 1958) の vol. I. II. の全詩篇総数283より, vol. I. にある Trifles by Swift and his Friends としてまとめられているものの中29篇 (The Rev. Thomas Sheridan, The Rev. Patrick Delany, George Rochfort, etc. の書いたもの), 及び vol. II. にある Epistles and Addresses としてまとめられているものの中1篇 (Jonathan Smedley の書いたもの) を除いたものである. 従って, スウィフトの詩篇総数: 253というのはあくまでその限界内においての数である.

II. への「注」

1. 二語並列の語のうち, gross philosophy が他とかけはなれた特異な感じを与えるかも知れないが, これにはスウィフトが彼の青年時代に身をもって体験した印象が強くにじんでいる.

この gross philosophy と pride を並列させて用いているのは *Ode to Dr. William Sancroft* (1692: 少くとも1689年5月以降に書かれている) 中であり, 同時期に書かれた*Ode to Temple* (1692) においても gross 'philosophy' を 'the gleanings of philosophy', 'the lumber of the

schools', 'the roguery of alchymy', として攻撃しており，この pride と gross philosophy の並列は A) b. の pedantry (*Ode to the Athenian Society*, Feb. 14, 1691–2) と相通ずるものであり，彼の Trinity College における philosophy に対する不満，あきたりなさが，[1] 1683年にダブリンに創立された The Dublin Philosophical Society (ロンドンの Royal Society の仕事を発展させる目的で) と Trinity College のまずい関係に対する攻撃が彼の意識上にあったためではないか. pedantic な philosophy へのあきたりなさが Temple, Athenian Society への讃辞にも，'proud doctors' の横行する時代にありながら 'Truth' を求め，'led blindly on by avarice and pride' されることなく，信仰に生きた Sancroft への賞讃にも，かなりどぎつく出ており，学問上の pride への攻撃と思われる. このような pride への攻撃と同性質の 'college pedants' や 'vulgar idiots' の pride への攻撃は II. A) a. の ignorance と pride の並列からもうかがえる.

2. pride と tobacco, censure, coffee, port の並列は一見奇異であり，ふざけた書き方とみなされるおそれのある並列のさせ方であるが，「酒」「タバコ」「コーヒー」は「叱責」「虚栄」と共に不徳のものであると考えられており，'vices of the graver sort' なのである.

pride を 'vice'=moral vice と考えており，この並列は pride を道徳上からみている顕著な一例である.

pride を道徳上からみているものとして，その他に，特に A) a. の vanity, insolence, passion, profit, wealth, luxury, b. の conceit, expence, c. の self-love, との並列があげられる. これらに対する攻撃は「過度の」ものになされるものであり，そこに気をつけねばならない. たとえば 'self-love' にしても，時代の流れはそれ (self-love) を認めていたのであり，スウィフトといえども そのことに やぶさかで はなかった. スウィフトが pride として攻撃しているのは 'self-love' を 'motive of all actions' と

するような極端な態度に対してである.[2]

3. pride を政治上からみているものの一例として A) b. の 'faction' との並列があるが, これは Whig, Tory 間をかけずり廻ったスウィフトの政治に対する態度の謎を解く一つの鍵となろう. この 'faction' との並列は c. の 'ambition' との並列と共に, 彼の攻撃している pride の性質をあらわしている.

4. pride と共に並列されている中で最も頻度数の多い envy, cruelty (各3) は, よりばくぜんとしたプライド攻撃の性質をみせている. 道徳, 政治上というよりは, もっと広い一般的なものであり, 'avarice' と共に pride 攻撃の底に流れているスウィフトの態度をにおわせている.

人間個人の人格価値から浮き上った pride は, envy を誘い, そうした pride は avarice, cruelty を帯びたものへと変化する. 「秩序」の破壊へ導くのみならず, pride から生じる cruelty は個人の内部までもむしばむ危険性がある.

こうした pride 攻撃に際してスウィフトは 'religion' という彼にとって最も強い武器をプライド攻撃の宝刀としてふところにしのばせていたことがうかがえるが, 決してその宝刀を正面から大上段にはふりかざしていない. あくまで pride 攻撃の底流にとどめている.

pride 攻撃に際しても 'religion' を宝刀としていることは pride と並列させている 'envy' を 'seven deadly sins' (Pride, Lechery, Envy, Wrath, Avarice, Gluttony, Sloth) の中のものと次のように並列させていることからもうかがえる.

Envy, Spite, and Rage, (*Verses writ by Dr. Swift*, 1732/1733)

Envy, Slander, Sloth and Doubt (*Desire and Possession*, 1727/173-5)

Envy, Stings and Hisses (Verses on the Death of Dr. Swift, D. S. P. D. 1731/1739) etc.

5. 人称代名詞の所有格 or its, what+pride を目的語とする動詞のう

ち，頻度数の最も多い mortify は pride の限界に対するスウィフトの忠告をあらわしているようである．pride を 'gratify' し，'enflame' しようとすれば，その pride は 'humble' されるのであり，pride は 'justify' されねばならないものである．

6. 攻撃される pride の特質は II. C) のものにもよくあらわれている．これらの特質を有したものは過度の pride として攻撃されている．'over-weening' pride は必要以上の優越的感情，態度，「他」に対する軽蔑を惹起するものであり，自己に対して過大評価をかもし出すおそれのあるものである．

7. Pride of Brutes' は 'the Joy of Man' と同格的（並列的）に用いられているが（*Riddles* ?/1735）II. E）には入れなかった．

ここにみられる Pride への思考には，18世紀における類似的思考[3]がはっきり出ており man と brutes を比較対称させて，人間一般の pride 攻撃をしている．この論法は神（天使）と人間の差を如実に思わせ，人間の pride への攻撃を効果的にしている．このような思考を効果的に用いて人間一般のプライドを攻撃しているもののうち，顕著なものとしては *On Poetry:* A Rapsody (1733/1733) に次のような個所がある．

All Humane Race would fain be Wits,
And Millions miss, for one that hits.
Young's Universal Passion, Pride,
Was never known to spread so wide.
.....
What Reason can there be assign'd
For this Perverseness in the Mind!
Brutes find out where their Talents lie:
A *Bear* will not attempt to fly:
A founder'd Horse will oft debate,

Before he tries a five-barr'd Gate:
A *Dog* by Instinct turns aside,
Who sees the Ditch too deep and wide,
But *Man* we find the only Creature,
Who, led by Folly, combats Nature:

8. 'great は *Peace and Dunkirk* (1712) 中に,

The towns we took ne'er did us good:
What signify'd the French to beat?
We spent our money and our blood,
To make the Dutchmen proud and great:

として用いられている 'great' であり, 'proud' 'arrogant' と同意味に用いられたものと判断して, II. の「攻撃」されているものの中に入れた.

これと同じ意味で用いられている 'great' として, *The Beasts Confession to the Priest* (1732/1738) の前書き中に次のような個所がある.

So great is the Pride of Man.

III. への「注」

1. 'decent, modest pride' はスウィフトの認めたものであり, それは人間に許された限界をわきまえ, 秩序を乱さぬ, むしろ秩序維持に必要なもの, と考えられているようである.

Your Virtues, all suspended, wait
Till Time hath open'd Reason's Gate:
And what is worse, your Passion bends
Its Force against your nearest Friends;
Which Manners, Decency, and Pride,
Have taught you from the World to hide.

(*To Stella, who Collected and Transcribed his Poems*, 1720/1727)

Thus, *Gay* the *Hare* with many Friends,

Twice sev'n long Years the *Court* attends;
Who, under Tales conveying Truth,
To Virtue form'd a *princely* Youth:
Who paid his Courtship with the Crowd,
As far as *modest Pride* allow'd;
Rejects a servile Usher's Place,
And leaves St. James's in Disgrace.

(*A Libel on the Reverend Dr.Delany and his Excellency John Lord Carteret*, 1730/1730)

2. 'an old unvanquish'd' を III. の「是認」されているものの中に入れたことは妥当性に欠けているとみなされるかも知れない. が, この 'an old unvanquish'd' pride は *To my Congreve* (1693/1789) の中で,

Godlike the force of my young Congreve's bays,
Soft'ning the muse's thunder into praise;
Sent to assist an old unvanquish'd pride
That looks with scorn on half mankind beside;
A pride that well suspends poor mortals fate,
Gets between them and my resentment's weight,
Stands in the gap 'twixt me and wretched men,
T'avert th'impending judgments of my pen.

とあるもので, A pride.....の正しき方向へ向ったものであり, スウィフトの人格価値の自覚とみなし, 卑劣なるもの (half mankind) に対して抱く自負, 正しき謙遜とみなして III に入れた. 無制限の, 無批判の自己に対する過大評価ではなく, 人間性に立脚した, 謙虚な, どうしても「打ち勝ち難い」自己の能力, 使命に対する, 当然の権利としてのプライドとみなしたからである. 決して Congreve に対するスウィフトの「シット」「思い上り」ではなく, Congreve[4] に刺激されての, スウィフト自身の未來へ

の覚悟のあらわれ（satirist としての）とみなしたからである．この‘an old unvanquish'd pride’への解釈の仕方は，スウィフト評価の分岐点となる性質を帯びているものの一つのように思われる．

× × × ×

全体として，詩にあらわれたスウィフトのプライド観には．ポープの「人間論」にみられるような正面だった一般論としてのプライド観はほとんど見当らないが，側面的，限定的，具体的論じ方〔スウィフトのプライドという語の描写の特徴として（1）並列描写（27語）（2）限定づける形容詞の附加（13語），という二大特徴があり，プライドという語はスウィフトの詩篇253中，76語であるから，（1）（2）（計40語）の，総数76に対する割合は52%強にもなっている．〕により，プライドに限界をもたせ「けじめ」をつけようとしている態度（e. g. *On reading Dr. Young's Satyrs, called the Universal Passion, by which he means Pride,* 1726/1734 の論じ方にその方向がうかがえる．）が見受けられる．しかし，あくまで詩においては断片的〔*A Satirical Elegy on the Death of a Late Famous General* 1722/1764 の

Let pride be taught by this rebuke,
How very mean a thing's a Duke;
From all his ill-got honours flung,
Turn'd to that dirt from whence he sprung.

というような個所さえ，あまりみられない．〕であり，論じ不足の感がある．プライド観が積極的正面からの主要主題となっているものは少なく，詩においては，むしろ，潜在勢力としての重要さを保っている．ここにも，プライド観表出の点からも，詩形式におけるスウィフトの表現能力の限界がうかがえるようであり，プライド観表出も，散文形式をまたねばならないようである．

× × × ×

注

1. Ricardo Quintana: *The Mind and Art of Jonathan Swift* (London, 1953) p. 5, p. 31 を参照.
2. Kathleen Williams: *Jonathan Swift and the Age of Compromise* (London, 1959) pp. 43–63. を参照.
3. 特に pride との関連においては, Arthur O. Lovejoy: *Essays in the History of Ideas* (New York, 1960) pp. 62–68 に詳しく論じられている.
4. Ricardo Quintana は 'One of Swift's finest characteristics, evidenced throughout his life, was an utter lack of any sense of rivalry with his literary fellows.' (*The Mind and Art of Jonathan Swift*, p. 40) といっている.

〔テキスト〕

Collected Poems of Jonathan Swift (edited by Joseph Horrell, vol I. II., London, 1958)

本文中の引用はすべてこのテキストによった.

* この統計には, すべて, 分類上の重複を避けているため, その点で制約をうけている.

例えば, IIA) に用いられたものは A) 以外の特徴を有しているものも, IIA) のみに入れ IIA) 以外には入れられていない. それらは次のようである.

To feed his luxury or sooth his pride → IIA) に. (II B) には入れていない.) 〔同様にして II A) に入れたものには, false patience and mistaken pride, strange pride and insolence, to pamper luxury and pride, with wealth and with pride〕

gratify their lust of pride → IIE) に.

breeding, and wit, and air, and decent pride → IIIA) に.

with conscious pride → IIIC) に.

mistake for pride → IV の前置詞+pride の形に.